

医療安全管理ニュースレター

日本医科大学千葉北総病院
(第56号)

発行：令和6年12月2日(月)



千葉北総病院における防火・防災について (訓練の大切さを知ろう)

庶務課 防火・防災管理者 川上 秀人

私は当院の防火・防災管理者として、火災はもとより各種災害対応について、前職でもある消防職員時代に培ってきた知識や経験を院内職員と共有し、患者さんやその家族等に安全で安心な環境の提供を職務としています。

近年の災害は、大地震や気候変動等による自然災害が激甚化・頻発化しており、その都度多くの傷病者が発生し医療機関においても的確な対応が求められています。

災害という緊急事態に直面したとき、異常な心理状態と環境の中でとるべき行動をとっさに判断し、的確に対応することはなかなか困難です。イギリスの心理学者の研究によると災害に見舞われたとき70%の人がぼう然として何もできない凍り付き症候群が起きているとの結果を発表しています。日頃から繰り返して訓練を行い、行動を体で覚えておくことが非常に大切です。

消防職員時代では「苦しい、疲れた、もうやめたでは人の命は救えない」をスローガンに、先輩からの教えである「すべての行動は確実であること。基本に忠実で確実な動作は安全である。迅速は反復訓練を重ねていけば自然と身に付く。焦らずまずは確実性を身につけること。」を基本事項として徹底的に訓練を重ねた経験があります。その甲斐があつて消防職員人生を全うできたと今でも感じています。

2024年1月2日に羽田空港で発生した日本航空機と海上保安庁機との接触により双方の航空機が火災となった事象では、日本航空機乗員乗客379人の全員が一人残らず脱出できたことは奇跡と称賛されています。その背景には絶え間ない訓練が成果につながったと言われており、訓練の大切さを改めて実感致しました。

当院では、各種勉強会を基本として、部署毎に実施している防火訓練や病院全体で行う災害机上訓練、災害実働訓練及び震災初動対応訓練など積極的に訓練を重ねています。当院は基幹災害拠点病院であり、災害時に多くの傷病者を受け入れると同時に他の病院の支援を行わなければなりません。このような事から病院に機能的な障害が発生した場合は、期待されている医療連携が困難になるなど、病院内の災害対応は重要です。

また、訓練の良いところはその都度災害対応に向けた意識が高まることです。テクニカルな部分も含めマニュアルに従い実践してみると、いろいろな改善点に気づきその積み重ねがレベルを押し上げ(PDCAサイクル)、病院全体の底力になるとともに医療安全にも資するものとなります。

訓練というと堅苦しいイメージがありますが、一人では何もできない赤ちゃんが、多くの経験を経て大人になるように、皆さんも訓練の繰り返しによって是非、緊急時の行動を確かなものにしてください。訓練は決して嘘をつきません。

このように、これからも訓練の大切さを啓発し推進してまいりますので、皆さんのご理解ご協力をよろしくお願い致します。



防火訓練の様子

千葉北総病院における 救急救命士の活動と医療安全について

救命救急センター 救急救命士 菅原 瑛里夏

病院内の医療技術職の一つとして、救急救命士（以下、救命士）の雇用が全国的に増えてきていることを皆さんご存知でしょうか。救命士という救急車で活動する人、病院までの搬送をする人というイメージがおそらく強いと思います。事実、数年前までは救命士の医療行為は救急車内に限定されており、病院内での活動は不可能でした。医師の働き方改革やタスクシフト等の観点から、2020年より病院内でも医療行為が可能になり、全国的に病院での救命士の採用が増えています。

北総病院でも、2023年4月より救命士の雇用が開始され、現在3名が在籍しています。業務としては①救急外来での診療補助 ②ドクターヘリ、ラピッドカー注1)での病院到着前の救護活動 ③転院搬送 ④学生や医療スタッフへの教育・研修を行っています。



救命士3名での記念撮影

救急外来では、医師が診療にあたっています。救命士と看護師もその中で一緒に医療機器や環境の準備、整理を行っています。具体的には、物品準備やベッドメイキング、患者移送といったことから、バイタルサインの測定、点滴用静脈路の確保といったことも行っています。救急の現場は緊迫感があり行うことも多いですが、その中でも医師は診察に、看護師は看護に、本来の専門分野に専念できるよう、サポートを行うことも病院内で活動するうえで、大きな役割だと思っています。

救急外来では、医師が診療にあたっています。救命士と看護師もその中で一緒に医療機器や環境の準備、整理を行っています。具体的には、物品準備やベッドメイキング、患者移送といったこと

また、近年は救急搬送の需要が増えていることにより、転院搬送は極力、ドクターズカー（病院所有の救急車）で実施することが求められています。地域によっては転院搬送の依頼は断っている消防もあります。病院の救命士は、転院の調整・搬送をすることが地域の医療として求められているのです。

さらに、BLS注2)・ICLS注3)といった患者急変対応の研修コースにもインストラクターとして参加をしています。北総病院で実施されている毎月のBLS講習には必ず救命士がインストラクターとして参加しています。実際に急変が起きた場合には誰も慌ててしまうかと思いますが、その様な時でも冷静に行動できるよう、定期的に職員研修を、市民の皆さんには蘇生研修に関わる学習の機会があれば是非、参加していただければと思います。

救命士の制度自体が変わって4年、北総病院もまだ雇用を始めて1年半です。病院の救命士として様々な活動を実施していますが、救命士の病院内での活動を現在も模索し続けており、課題も山積しています。歯がゆい思いをすることも多々ありますが、まずは、皆さんが救命士という医療技術職が病院内に在籍していることを認識し、どういった業務をしているか知っていただければ嬉しく思います。

※注1) ラピッドカー：病院所有の救急車

※注2) BLS：Basic Life Support

※注3) ICLS：Immediate Cardiac Life Support



BLS指導の様子



救急救命士ユニフォーム



編集後記

今回は、防火・防災管理者の川上さんと救急救命士の菅原さんにご寄稿いただきました。川上さんは元消防官の方で、現場を知るプロの目で指導いただけ、大変心強く思います。訓練の重要性も認識を深めました。救急救命士は、北総病院の新メンバーです。「all for one」のため、スクラムを組むメンバーを知ることが、とても重要です。これからは様々な職種の視点による医療安全を紙面で紹介したいと思います。

岡本 直人 記

【ご意見募集】

皆さまのご意見をお待ちしております。

電子メールアドレス
h-newsletter@nms.ac.jp

【お知らせ】

当院のホームページから閲覧できます。
ホームページアドレス
<https://www.nms.ac.jp/hokuso-h/>

【編集担当】

医療安全管理ニュースレター編集委員会

片山靖史(委員長)

金 徹	矢野 綾子	岩井 智美
花澤みどり	岡本 直人	小野澤伸悟
石井 聡	岸 大輔	